

Title	『日本書紀』のメディア定着批判 - 6世紀の中国記録「扶桑国」をめくって -
Author(s)	壺岐, 一郎
Citation	沖縄大学人文学部紀要 = Journal of the Faculty of Humanities and Social Sciences(1): 19-28
Issue Date	2000-03-31
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12001/6036
Rights	沖縄大学人文学部

『日本書紀』のメディア定着批判

－ 6世紀の中国記録「扶桑国」をめぐる－

峯 岐 一 郎

要 約

日本古代史のいわゆる古墳時代から7世紀末までを高校教科書では約20ページにわたり記述している。5世紀の倭国の五王から7世紀の聖徳太子、天智天皇という流れである。この原典は『日本書紀』で、教科書は戦前の神国史観を否定しているものの、まず6世紀以降をほぼ正しいとしているとあってよかろう。戦後史学において、中国史、韓国史との比較、巨大古墳の考証などが進んだとはいえ、まだ重大な疑義が存在する。その大きな柱は中国史料の伝える前3世紀の徐福集団の渡来と6世紀の扶桑国である。1999年は扶桑国僧・訪中1500周年にあたるので、私は日本国内4地域で「扶桑国の謎・シンポジウム」を試みた。『日本書紀』の黙殺した史料の復権であるが、無視する学界と共にマスメディアと教科書メディアに再考を迫るものであった。この『日本書紀』(日本書紀)をかかす紫式部は「片そば」と批判し、公卿西園寺公望(1849－1940)は「妄誕*の書を信じると国に大いに損がある」(*でたらめ)と書き残したが、20世紀の歴史は「損」どころではなかったのではなかろうか。

キーワード：日本書紀、扶桑国、教科書メディア、少数説

扶桑国の基本資料

7世紀、初唐に編修された『梁書』の諸夷・東夷は序文で「在昔未聞」としながらも、証言者の僧がその国を「尤悉」していたので記録したと異例の断りを記した。倭、文身国、大漢国に続く扶桑国は原文500字であり、最後に東の女国を記す。僧の証言は扶桑国以下の2国である。この『梁書』の後に南朝4王朝の『南史』が編修され、扶桑国はほぼ同文が記録された。これら正史のほかの中国資料につきのような書がある。

- 1 『通典』(杜佑)
- 2 『梁四公記』(張説)、『酉陽雜俎』(段成式)
……以上、唐代
- 3 『鄴交徵書』(丁復・長詩)……元代
- 4 『洛陽伽藍記』(楊衒之、一四夷館・扶桑館)
……北魏

扶桑の名は唐詩の中にも見られるが、これら中国側資料を受ける日本側資料は多いとはいえない。10世紀の『三代実録』に「李延寿が遥かな扶桑を指して一船を出発させ」とあるのが初出に近

い。『風土記』の「日向風土記」の中に「この国の地形は直ぐに扶桑に向かへり。日向と号すべし」とあり、14世紀の『釈日本紀』からの引用で、扶桑にひいづるかた、と訓している。これより前、12世紀には僧皇円の『扶桑略記』が書かれており、仏教史概説に扶桑と付したのが注目される。このほか「扶桑」の名を記した書に北畠親房『神皇正統記』ほか数書の論集があるが、江戸時代の松下見林説以外、その存在を追及する論は少ない。が、全体として芭蕉以下「扶桑日本説」である。

ようやく幕末の国学者、平田篤胤(1776－1843)に至って、本格的な扶桑国論が登場する。400字で130枚をこえる論文で『大扶桑罔考』といい、扶は木偏である。平田は扶桑の字の解釈のため『山海経』考証に全体の2分の1を割き、最後は僧を馬鹿者扱いで罵倒する。「皇国の実事をでたらめに証言した」と突き放す。¹⁾

江戸国学の伝統を汲むという東京帝国大学の東洋史学者、白鳥庫吉(1865－1942)は、20世紀の初めに二度にわたり『扶桑国に就いて』を発表

している。『地学雑誌』(1907年、明治40)、雑誌『東亜之光』(1917年、大正6)を読むと、さすがにヨーロッパの扶桑研究を紹介しながら、東夷伝をよく分析している。ほかの『梁四公記』などを比べて僧慧深を徹底的に非難し、「巧妙な詐欺師」と5万字の論文で断定する。³⁾

20世紀の初めに東大の高名な学者が証言者を痛罵したため、後続の研究者は扶桑国研究を避け、折しも帝国日本、神国日本、天皇国家キャンペーンが加速された。

戦後の歴史研究者も実証と論証を基本にしながらか、『日本書紀』と巨大前方後円墳から自由でない。扶桑国についての単行本は小著『扶桑国は関西にあった』(1995年、葦書房、日本図書館協会選定図書、全330ページ)のみという。邪馬台国の書籍が300冊をこえているのと対照的である。20世紀の終り、研究者は約10人で小論文がある。

現代中国では散発的に研究がなされ、90年以降、私の読んだのは4編である(後述)

朝鮮では高麗僧・覚訓の『東国高僧伝』に扶桑国、文身国、大漢国を明示していて注目すべきだと長沼賢海の指摘がある。⁴⁾

さて、このような資料に恵まれながら、20世紀の後半においても扶桑国研究は進んでいない。まず99年10月刊行の岩波書店『日本史辞典』(1万8千項目)も扶桑国は記載されず、山川出版社『日本史広辞典』(97年12月)の掲載、解説をこえられなかったといえる。

前記の小著を上梓したとき、1999年の扶桑国僧訪中1500周年を予想していた私は、98年年初から中国と日本の関係研究機関、大学へシンポジウムの可能性の打診を始めた。北京、洛陽、南京などの研究機関と国内における歴史研究の市民団体である。

その結果、99年になって大阪、東京の4団体が協力を表明して開催が決まり、その実施段階で秋の福岡、名古屋開催が実現した。実施状況はつぎの通りである。

大阪	8月28日(土)	府立労働会館	70名	医師、公認会計士、 学者、専業主婦、 中国、韓国籍ほか 市民有志 各整理費500円
東京	29日(日)	学会館	60名	
福岡	10月16日(土)	紀伊国屋イベント広場	30名	
名古屋	30日(土)	東別院会議室	10名	

それぞれの地域で開催のひと月前に代表的な大学に案内を出し、既知の少数の文化人に連絡し、新聞各社とNHKラジオと九州朝日放送ラジオに告知を依頼した。結果的に朝日新聞ほかの全国紙は告知してくれたが、地元紙は案内がなかったように思われる。また『沖縄タイムス』のコラム「魚眼レンズ」で扱われ、『日本と中国』(日中友好協会)の取材をうけたほか、九州朝日放送ラジオは私との電話インタビューを放送した。「扶桑国」は知名度がないに等しく、新聞社も扱いに苦労したと聞いた。

先に紹介した2点の歴史辞典は全1巻だが、このほか全10冊をこえる大歴史辞典での扶桑国の扱いは架空説が多く、黙殺、無視が多い。⁴⁾

さらに、扶桑国の問題は位置論と仏教の早期伝来だが、宗教学界もこの問題には触れてこなかったのが惜しまれる。

東夷・序文、『梁書』諸夷(筆者訳、1984年)、各国(略)

倭……帯方郡を去ること1万2千余里(900キロ弱)……(略)

文身国は倭国の東北7千余里(500キロ余)にある。……(略)

大漢国は文身国の東方5千余里(400キロ弱)にある。……(略)

〔扶桑国〕

扶桑国とは、南斉の永元元年(499年)、その国の僧慧深が荊州にきて話した。

○ 扶桑国は大漢国の東2万余里(千数百キロ)の所にある。土地は中国の東にあり、扶桑の木が多いので国名にしている。扶桑の葉は桐に似て、初め生えるときは筍(箐)のようであり、国人はこれを食用にしている。実は梨のようで赤い。その皮をつむぎ、布にして衣や綿(絨)をつくる。

板屋をつくる。城郭はない。文字はあり、扶桑の皮で紙をつくる。兵士はおらず、戦争をしない。

その国の法律では南北に獄がある。もし、罪の軽い者を南獄に入れれば、重い者は北獄に入

れる。赦す場合は南獄を赦し、北獄は赦さない。北獄に入れた者にそれぞれ男女を配して、男子が生まれれば8歳で奴とし、女子が生まれれば9歳で婢とする。罪を犯した者は死ぬまで出られない。貴人に罪があるときは国中が大いに会し、罪人を坑に坐らせ、これに対して酒宴を開き、訣別し、死別するのである。その上に灰をまきめぐらし、一重ならば一身が身をつつしみ退き、二重ならば累は子や孫に及び、三重ならば7世に及ぶ。

国王を名づけて乙祁といい、貴人の第1を大対廬といい、第2を小対廬といい、第3を納咄沙という。国王が出て歩くときは鼓笛が先導する。その衣の色は年によって替え、甲乙年は青、丙丁年は赤、戊己年は黄、庚辛年は白、壬癸年は黒である。

牛に角があり、たいへん長く、20斛以上も物をのせている。車には馬車、牛車、鹿車がある。国人は鹿を飼っていて、中国の蓄牛のような扱いである。乳をしぼって酪(飲料)にする。桑や梨があり、ながく朽ちず、蒲桃が多い。

その地に鉄はなく銅があり、金銀を喜ばない。市場に税や値はない。

その婚姻の習俗は、男が女の家へいき、門の外に小屋をつくり、朝夕、掃き清める。しばらくして女が悦ばなかったらこれを取り除き、女が悦べば婚姻が成る。婚礼はだいたい中国と同じである。親の喪には7日間食を絶ち、祖父母の喪には5日間、兄弟姉妹、伯叔父、伯叔母の時には3日間食べない。霊を設けて神像とし、朝夕伏し拝むが、喪服はきめていない。

王の後継ぎが立ったが、3年間、国事を視なかった。

- その習俗にはもと仏教はなかったが、宋の大明2年(458年)、罽賓国の僧5人がきて、經典、仏像を伝え、教えをひろめて出家させたので、やがてその習俗も変わった。

「女国は扶桑国の東千余里(80キロ程)にある」と慧深は言った。……(略、○印、筆者)

この『梁書』および『南史』を受けた内外の論調にはぎのようなものがある。

- 1 中国の扶桑国論文
 - 「扶桑神話と日本民族の起源」何新、『学習と探索』89, 4-5 黒竜江省社会科学院
 - 「扶桑国は日本でメキシコではない」常征、『中日関係史学会』89, 2 同会
 - 「扶桑考」王元化-『辞海』と諸橋『大漢和』の扶桑積比較 p1~7
 - 「也談“扶桑”」陳福康、97-4『鄭和研究』-99年に大阪教育大学で研究
- 2 現代日本の扶桑国研究(アイウエオ順)
 - 赤松文之祐 『現代の眼』77, 6 82, 1「扶桑国論」、扶桑国関西説、文身国出雲説
 - 大芝英雄 『古代の風』連載 98-1、市民の古代会員、北関東説
 - 清水守民 「日十大王年とヤマト扶桑国」-99シンポ4地区報告
 - 中小路駿逸 追手門大学教授 国文学 市民の古代、年報など、漢詩の扶桑研究、阪大・医療・紀要
 - 中野美代子 北大名誉教授 「扶桑国」上下、80、『遊』1014-5 サハリン説
 - 古田武彦 『古代は輝いていた』Ⅲ p130-138、朝日新聞、86
 - 細田 通 『古代の風』94, 98-1連載、市民の古代会員 架空説か
 - 松本喜代子 河出版『日本史大辞典』解説 81、架空説
 - 毛利康二 『東アジアの古代文化』94-1、「『梁書』の扶桑国」、ウルルン島説
 - 吉田健正 桜美林大学教授 『季刊邪馬台国』83-1、「扶桑国は日本のことか」
 - いき一郎 『季刊邪馬台国』81-1、「倭国の五王と関西扶桑国王」『公評』93, 8、「古代史最後の謎・扶桑国」-関西説
 - 『東海大学短大部紀要』94年「日中古代関係史における扶桑国」

3 一般辞書

諸橋轍次、60年『大漢和辞典』大修館—日本のこととする

新村出、76年『広辞苑』岩波書店—日本国の異称

小柳司気太、36年『新修漢和大辞典』博文館蔵版、支那人、日本を指していふ、愛知大学編89年『中日大辞典』2、(転)昔時、日本の別称、大修館書店

上海辞書出版社『辞海』80年—昔時、倭国を日本を呼ぶ、日本の旧称

このように、中国正史の記述に対する論文としてはまことに寥々たるものである。有名な『三国志・魏志倭人伝』とくらべれば千分の一であろう。

学説のメディア定着構造

学界の『日本書紀』肯定と扶桑国記録無視は120年以上にわたる教科書メディアの盲信を支え、日本国民の常識を固定し、観光案内および報道を支配してきた。20世紀の前半に皇国は敗北して神国意識と制度は崩壊したかに思えたが、古代および19世紀後半に続いて三度蘇ろうとしている。古代史における市民的意識の危機である。

史上、多くの研究者は「日本」という文字を冠した『日本書紀』(すなわち現存のこの書を720年完修『日本紀』として論じる)が公正で客観性の大きい書と信用しすぎた。

現代を代表する文化人、哲学者の梅原猛は『聖徳太子』1の序文で「はなはだ冷たい歴史記述の書である日本書紀が、太子に対してのみ理性の抑圧を失い」と書いた。⁶⁵⁾

一方、非専門家で一世風靡した古田武彦も『古代は輝く』Ⅲの武烈の項で「いわば首尾一貫した史書であるけれど」と書く。⁶⁶⁾が、はたしてそうだろうか。

一方、福岡県で地味な郷土史研究を続けた筑紫豊(1904—1982)は筑紫万葉を扱った『古代筑紫文化の謎』の序文に「万葉びとの信仰や史観そのものである『日本書紀』は、わが山島人にとってはともかく、対外関係、とくに朝鮮半島関係においては、はなだしく内尊外卑の史書であるので、その点、けって公正な書物ではないことを、念

のため付記しておく」と鋭くえぐった。74年、筑紫万葉集紹介の冒頭である。(新人物往来社刊)

東京や京都の文化風土に住んできた人といわゆる「地方」に長く住んでいる人の判断の違いはどこからくるのだろうか。

また、現存『日本書紀』はヤマト国家の成立を古く設定して、戦後史学も70年代初めには4世紀ごろ皇室の祖先が国家をつくった、という定説を認めていた。しかし、79年1月、「日本国家の成立」をめぐるシンポジウムで最も権威のある井上光貞教授らが、「日本国の成立は筑紫の磐井の乱のころで、磐井の乱も乱とはいえまい」として少なからぬ研究者や市民を驚かせた(直木孝次郎・文、朝日新聞1, 29、李進熙『歴史読本』80, 5)。司会が松本清張で井上氏のほか、西嶋定生、杉山二郎、門脇禎二、森浩一らの諸氏の出席であった。市民を驚かせたのは古代国家の成立が一挙に200年遅くなったからであった。率直に言えば定説も『日本書紀』もあやふやで、何が起こるか分からないともいえるようである。すでに、戦争直後の江上波夫の「騎馬民族征服論」があり、「王朝交替論」や古田武彦の「九州王朝論」が先行していた。⁶⁷⁾これらはつぎのような定着過程をしめす。

学界多数説—定説化—教科書メディア—常識化

伝説化

報道(マスメディア)

観光案内、博物館

したがって、この定説を覆すのは容易ではないことが分かる。

たとえば、7世紀初頭に活躍したといわれる推古女帝、聖徳太子にしても、実在の証拠は皆無であり、70年代の岡田英弘説以来、実在を疑う説が増えている。⁶⁸⁾

これに対し、「神功皇后の三韓征伐」は70年代以降、関西の在日韓国人の努力により、西日本のマスコミ機関が反省して改善されるようになった。因みに『古事記』では「三韓征伐」はほんの8行(岩波版・読み下し文)ほどで海を越えるときに魚が船を背負ったという話、新羅の地を皇后が踏んだことが短く記されているのが、『日本書紀』では「摂政」前紀と就任後に分けて大きく脚色され、筑紫豊のいうように内尊外卑を拡大する。

この正史は決して「公平」でも「客観的」でもないばかりか、はなはだ偏向していて感情的、主観的なものだというを内外に証明するものである。

しかも、19世紀後半から文部省による教科書づくりの中で、小学校から「国史」だけでなく「国語」「修身」を中心にほかの学科、たとえば音楽（唱歌）などすべてに神国日本、万世一系の天皇統治が喧伝された。したがって、歴史学者も少年時代からこの強大な台風の影響下にあり、疑問を挟む余地はなかったのである。同時にこの「皇国史観」に反対することは生活権を奪われることでもあったことを忘れてはなるまい。津田左右吉の例が想起されよう。⁶⁹

このような経験から、多数説、定説は無難であり、かつ政府の奨励から強制の度を加え、敗戦後から20世紀後半にも生き延びた。一方、庶民の中では北部九州の背振山、嬉野温泉、宇美八幡など、「神功伝説」が不死鳥のように生きている。

さらに、一度覚えられた名称、伝説は架空であっても訂正できないのが常である。その最たるものは、大阪府堺市の大仙陵古墳である。遠くから見れば南北1キロもあるかと思われる緑の丘は広大で昔「仁徳天皇」のものだと教えられた。この呼称はなんとなく便利で記憶に残り、今も使われることが多い。しかし、便利だからといっても熟考しなければならないのは天皇の漢風おくり名であろう。天皇も皇后も奈良時代の750年代までは全体として和風の長い名であった（以下、岩波版文学大系『日本書紀』）

1代 神日本磐余彦天皇 カムヤマトイワレビコ
ノスメラミコト 後に「神武」

(略)

氣長足姫尊 オキナガタラシヒメノミコト
後に「神功」

(略)

15代 誉田天皇
ホムタノスメラミコト 後に「応神」

21代 大泊瀬幼武天皇
オオハツセノワカタケ " 後に「雄略」

26代 男大迹天皇
ヲホド " 後に「継体」

29代 天国排開広庭天皇
アメクニオシヒラキヒロハ " 後に「欽明」

38代 天命開別天皇
アメミコトヒラカスワケ " 後に「天智」

39代 天停中原瀛真人
アマノヌナカハラオキノマヒト " 後に「天武」

40代 高天原広野姫天皇
タカマガハラヒロノヒメ " 後に「持統」

これらの「天皇」または大王の中で確実な大宮にいたのは藤原宮の高天原広野姫だけであるが、一律に漢字2文字のおくり名を付けると政権自体が引き伸ばされ、強大化の幻想を生じることに気付く。『古事記』は全体としては天皇ではなく「命」（みこと）と記して飾っていない。

現代の皇室の行事で、明仁天皇が「125代」と言うことがある。近江の大友王子を数える説もあるが、ここでは『日本書紀』に従い、数えない。天皇家の行事が正史から定説化し、伝承となり、定着したと理解できないでもない。が、学問的論証とは別である。

したがって、天皇家の私事に政府が大きく参加し、ある勢力が利用することを警戒すべきことは歴史の教訓である。日本のミカドの歴史は京の庶民と共生し、象徴的に生産の神を守る役割を地味に務めた1200年が貴重であり、東京へ引っ張り出されて利用された120年を否定する。政治とメディアが悪用しすぎた世紀だったのである。

メディア利用の批判

20世紀の政治は古代天皇の復権のように明治憲法（1889年公布）をつくり、その実、自派の利用を計った。いわゆる「志士」「元勳」の多くは巨利を収めている。

その富国強兵路線は海外進出、侵略となり、1879年の琉球処分から「台湾処分」、すなわち台湾の植民地化、韓国の植民地化へ、さらに15年戦争へと隣国、周辺地域のみならず東南アジアに未曾有の損害を与えた。古代に範を取ったという「八紘一宇」の理想は加害の美化、自己の尊大化にほかならなかった。

これら70年余りの歴史に関して、教科書、新聞、ラジオ（NHK）などのメディアは明らかにその

伴奏をしたばかりでなく、ときにはタクトを振るった。一方の庶民はメディアに騙されただけでなく、積極的にメディアに圧力をかけた。新聞の歴史はただ右翼の攻撃だけでなかったことを物語る。1999年だけでも、秋の沖縄県議会において、卑屈議員による「天皇陛下万歳事件」があり、12月大分県別府市議会において「君が代斉唱」が一部議員によって強行されるという事実を知る。これらは天皇賛美というより、自己宣伝と自己陶醉といつてよい。この秋、未曾有という「天皇の即位10周年式典」が行われ、東京で皇居の暗闇に数万の民が「天皇陛下万歳」を叫んだ事実が残った。アジアから見れば不気味な日本人と映るだろう。欧米の市民社会からはこの現象が教科書や伝承によって「天皇から乳離れしていない日本人」を印象づけるものと思われる。

さらに一歩突っ込んで考えると、20世紀のメディアは国と天皇を悪用するものほど庶民を圧迫してきたことを伝える。これは8世紀初めの藤原政権と酷似している。⁹⁰

時は少年天皇、女性天皇が3代、35年続き、その後は藤原不比等死後、孫が天皇になるという時代であった。権謀術数の藤原氏のやりたい放題で無責任主義である。これは、あの第2次世界大戦の昭和10年代の重要な時代に首相が広田弘毅から終戦内閣、鈴木貫太郎まで林、近衛、平沼、阿部、米内、近衛、同、東条、小磯、と10代を数えることにも通じよう。首相の権限は小さく、キーワードは無責任で、天皇に実権を渡さない藤原氏のやり方のリバイバルであった。

しかし、メディアはこの制度上の無責任主義を追及することなく、強引な陸軍多数派にのみこまれて行く。1938年(昭和13)、朝日、毎日両紙は本社機能を大阪から東京へ移す。軍の目の前である。情報の首都集中という意味ではやむを得ないとも言えないこともないが、軍にとては願ってもないメディア攻略の好機と思ったであろう。

『日本書紀』に基づく「皇紀2600年」(昭和15、1940)キャンペーンが行われたころ、メディアは98パーセント権力側にあった。「南京大虐殺」は十分の一も知らされず、紙上では「皇軍将兵の百人斬り」競争が続けられていると報じていた。

この問題について論争があるが、他人の家に強盗に入って殺した事実は消えないことを知るべきであろう。

日本古代史の原典『日本書紀』は8世紀初めにはごくわずかの者が宮中で講話を受け、769年まで筑紫大宰府には中国史料を置かせないという状況であった。⁹¹

学校教科書に使われたのは19世紀末、広く読まれるようになったのは1930年代以降でしかない。この政府制定の「正史」は正面から学問的批判の対象にすることはできず1945年の敗戦を迎えた。戦後の出版メディアは「文学全集」でこの歴史書を扱っており、どこことなく皮肉めいて思える。普通の日本人のイメージでは文学とはフィクションの度が高いからである。今日、私たちは数種の『日本書紀』の読み下し文を読むことができるが、根源的な批判に会うことは少ない。むしろ、林屋辰三郎著『日本の古代文化』の啓示が鋭い。林屋は『古事記』と『日本書紀』を比較して「大伴氏の記念碑と藤原氏の記念碑」という表現を使った。⁹²

林屋の世代は徐福集団渡来や扶桑国についての文献に触れないのは当然とされようが、限られた視野で記紀の本質を突いたこの発言は注目に値する。私は林屋の発言をさらに追求して、「日本紀は半藤原紀、政治小説」ととらえた。⁹³

半藤原紀としたのは30年近い対座で全面的な藤原紀としない賢さを考えたからであり、実録と虚構が入り交じっているとしたからである。希代の政治家が介入した史書づくりについて学者は意外に純粋である。かつて私は家永三郎氏にも「聖徳太子架空説」を書いたことがあった。家永氏の岩波版・思想大系と古典文学大系『聖徳太子』の解説を読んでも7世紀の文献について断定できず、推測、推定でしかないと見たからであった。一方の中国、朝鮮史料は9世紀まではこのような「偉大な太子」を黙殺して記さない。『旧唐書』は新羅の王、金春秋には百万言を費やしているにもかかわらず、である。

ここにおいて、私たちは『日本書紀』が決して隣国や海外に通用する歴史書ではないことを理解しなければならない。古代の藤原日本と明治日本

は双生児であり、内外万民に有毒だというべきであろう。だから、裕仁天皇（昭和）最大のブレインだった西園寺公望に19世紀末の明治憲法起草者、文相井上毅を評して日記に書かせたのではなかろうか。

「妄誕の書を重んずるときは大いに国に損あり」

（でたらめの古事記、日本書紀を重んじては大いに国に損を与える）

京都、立命館大学で発見され、1990年10月2日、日本経済新聞ほか各紙で報じられた。

対策と提言

日本古代史を中国、朝鮮資料から追究しようとするとき、太田亮（1884 - 1956）の役割は大きい。太田は白鳥のような帝大教授の肩書はなかったが『姓氏家系大辞典』の大著があり、1928年『漢・韓史籍に顕はれたる日韓古代史資料』を編集した（72年復刻）。

太田はこの中に『梁書』文身国、大漢国、扶桑国、女国を入れている。1928年という時代を考えると勇氣ある態度といえる。戦後の70年代、平凡社版『東アジア民族史』（正史・東夷伝、74年）でも文身、大漢両国の現代語訳はあっても扶桑国は削られているからである。出版メディアも学界に追従せざるをえないという事情があるようである。したがって、「扶桑国」伝（条）の中国文（原文）は中華書局・標本点以外に近年の出版はない。小著も北京に連絡してこの版を使用してきた。

問題の扶桑国は私の解釈ではつぎのようになる。⁹⁰

帯方郡……………倭……………文身国……………大漢国	} 左の数字は余里	- 計 2万4千余里
(朝鮮) 12,000 7,000 5,000 (遠漢)		
(北部九州) (北陸) (関東)		
大漢国……………扶桑国……………女国	} 左の数字は余里	- 計 2万1千余里
(大中国) 20,000 (関西) 1,000 (東海)		

倭国という地域は多数説の関西ヤマトではなく九州チクシでないこの方角、里程では先の国が海中に没する事になる。問題は「大」の扱いで、大島、一大国などの例で英語でいえば great と far があるのである（諸橋大漢和）。また、証言した

僧は自国の北や東に中国側が文身、大漢と呼んだ国があるとは知らず、「大漢国」といえば「大中国」と信じ切っていたとした。今の多くの日本人と同じである。⁹¹

このように考えると、僧の証言は荒唐無稽とか、この男は巧妙な詐欺師というものではない。

証言に風俗の誇張があってもしかと押さえるところは押さえているといえる。同時に、仏教の458年伝来は今後の専門家の研究に待ちたい。関西の早期仏教伝来については伝教大師の先祖が滋賀で3尺の仏像を作って人を驚かしたという伝承があり、顕宗天皇3年（458年）という（京大『史林』1940、松本解雄）。南九州でも異国の空覚上人が仏法を伝えたという縁起が知られている。⁹²

なお、中国と朝鮮の史料、金石文などから日本古代史1000年の概要は次図のように構成される。『日本書紀』から離れている部分も多いが、大陸文明の観察として捨て去ることはできまい。記紀を否定した紫式部や西園寺に近いといえないはずだろうか。

すでに古代史学界では70年代から「日本国七世紀後半成立説」が提唱されて一定の位置を占めている。

教科書メディアとしては少数説や不明部分を明示することが、かえって少年少女の好奇心や向学心を刺激すると思われるがどうだろうか。私は異端の説を書いたり話したりしてきたが、若者には「試験には相手に合わせて解答するように」勧告している。⁹³

また、マスメディアは日本の古代を美化しすぎることなく、過不足なく表現することが望まれる。99年秋の東京・国立博物館構内の法隆寺宝物展などのテレビ解説は極度に緊張して葬儀の中継を見るようであった。「聖徳太子」を絶対化していて不当とも思えるほどに感じたのは私ひとりだけであるまい。奈良、八木生まれの研究者田村圓澄九州大学名誉教授のロングセラー『聖徳太子』は太子が8世紀になって急に有名になったとしているが、そのような存在なのである。⁹⁴

同時に藤原氏によって不当に差別されたエミシ、クマソや帝国大学教授によって罵倒された僧慧深らの名誉回復が求められよう。メディアは公

	前3世紀	前1世紀	2世紀	3世紀	5世紀	6世紀	7世紀	8世紀	
	『史記』 - 『漢書』 - 『後漢書』 - 『三国志』 - 『宋書』 - 『梁書』 - 『隋書』 - 『旧唐書』								
東 西 南	北魏・扶桑館								
	徐福東渡 … 東鯤人 … 澶洲 … 亶洲 …………… 扶桑国 ……								毛人
	平原の王 二十余国 数万家 …………… 大漢国 ……								……………日本国
	…………… 倭人百余国—倭人— …………… 三十余国—倭王—倭国王…………… 倭国……………								倭・竹斯・泰王
?	…………… 夷洲?	…………… 夷洲?	…………… ?	…………… 流求国				……………	

(沖縄大学地域研究所紀要10号、98年)

平に扱うべきであり、差別や罵倒の理由なき放置はよくない。

また、扶桑国の例は歴史辞典に「不明」と書いてもその記録の存在を示すべきであろう。

扶桑国500字は中国側からの古代1000年、『史記』から『旧唐書』までの朝鮮を除く東方列島史料の中で10分の1以上の比重を占めよう。いわゆる倭の関係記録は反復や重複が多いからである。しかも500字以上の倭関係記録は8点に過ぎない。その意味でも9点目の扶桑国記録は看過できない。ほかの学界では想像できない無視、黙殺である。

さらに文身国や大漢国となると21世紀半ばまで研究の進展は無理かも知れない。が、北陸文身国説は別にしても、古代日本において北陸の位置は重要である。越の道君がスメラミコトを自称したとヤマトの使者が高句麗使の前でなじる記述がある(天国排開広庭31年紀)。逆にいえば道君はそのくらい実力があったという証拠である。さらに近江大王時代には越道君伊羅都売が妃となり、万葉歌人志貴皇子を生んでいる。この近江系の皇室びと白壁王は770年、即位し(光仁天皇)、以後、近江系の皇統が続く。北陸の人と風土は当時の表日本であり、10世紀末の紫式部も父に従い1年弱を越の国で送っている。人の歴史はヤマト中心、京中心でないのである。古代史におけるヤマト中心主義のような今の日本の権力、さらに出版、映像メディアの過度の一極集中に大きな教訓を与える。

このような一極集中は少数説、異端の説を単純に排除する。教科書の国定化などがその好例であ

ろう。特定の学説しか認めないとしたら、教育、学問の未来は闇でしかない。

21世紀の教科書やマスメディアに求められるものは少数説の併記である。

まして、とかく問題のある『日本書紀』を基本にして学説、教科書記述、メディア表現が行われる現状を見ると、少数説併記の努力は重要である。

戦争と冷戦の20世紀を送る今、その土台となった8世紀『日本書紀』(にほん紀)が19世紀末に蘇った歴史の反省が求められる。必要とされるのは「人間の日本史」であって「国民の歴史」ではない。高校生以下の制服が明治以来の兵隊服、水兵服を多数使用している現実、有料テレビの「大河ドラマ」がほとんど武士を取り上げる事実は尋常ではなかろう。戦争と武力支配のミレニアムに別れを告げてよかろう。一部の教育関係者やメディア関係者とは違い、私たちは古代国家以来、まったく好戦的ではなく、排外的ではない。極端な排外思想を植え付けたのは『日本書紀』であって、その7年前の『古事記』に排外思想は薄い。この事実をまず学者とメディア関係者は認識し、友好の古代史を編集すべく努力することが望まれよう。長く権力の中枢にいたふたりの賢人、紫式部と西園寺公望がいみじくも日本書紀を片はし、でたらめと喝破しているのである。

注

- (1) 平田篤胤全集 7巻、76年 「大扶桑国考」 p 517～564
- (2) 白鳥庫吉全集 8巻、69年、p 15～36、p

- 71～90 岩波書店
- (3) 長沼賢海、68年『邪馬台と大宰府』太宰府天満宮文化研究所
- (4) 小著、95年『扶桑国は関西にあった』p 24 葦書房
- (5) 梅原猛 80年『聖徳太子』1 小学館 一序文
- (6) 古田武彦 86年『古代は輝いていた』Ⅱ 朝日新聞社
- (7) 江上波夫、67年『騎馬民族国家』中公新書(オリジナル-48年)
水野祐 52年『日本古代王朝論序説』-古、中、新の三王朝論
井上光貞 60年『日本国家の起源』-応神新王朝説、
直木孝次郎 64年『日本古代の氏族と天皇』「応神王朝序説」年
上田正昭 66年『大和朝廷』-三輪王朝から河内王朝へ
古田武彦 73年『失われた九州王朝』朝日新聞社
- (8) 岡田英弘 77年『倭国』中公新書、
平野雅曠 84年『九州王朝の周辺』私家版、熊本
いき一郎「飛鳥の幻」『公評』85年4～6月連載 各8ページ
石野信一郎 90年『聖徳太子はいなかった』『蘇我馬子は天皇だった』三一書房
- 「東アジアの古代文化」2000年冬号、特集。大山誠一p 2～22 朝日新聞、2000.2.14、文化欄、東京新聞3月5日、「特報」大山誠一説
- (9) 『津田左右吉全集』岩波書店、「筆禍」起訴は40年3月
- (10) 小著 97年『藤原不比等』p 241、三一書房
- (12) 『続日本紀』神護景雲3年10月条
- (13) 林屋辰三郎 70年『日本の古代文化』岩波書店、p 239ほか
- (14) 小著 96年『徐福集団渡来と古代日本文化』三一書房
- (15) 93年天津シンポジウム、『走向国際化的日本』共著、いき論文-p 51
- (16) 『祁答院町史』第5部、むらかがみ 史料編、85年、鹿児島県、同町
- (17) 小著 84年、92年再版『中国正史の古代日本記録』あとがき、葦書房、
- (18) 田村圓澄 65年『聖徳太子』中公新書

付記

99年の前記、扶桑国シンポジウムの前に、故高沢寅男氏と山折哲雄氏から興味を持っているとの信があった。政治家を止めた高沢氏はこれから経済と歴史を学ぶという気持ちがあがかわれたが、急逝された。記してご冥福を祈りたい。

宗教学者の山折氏は北の貧しい寮で共にしばらく起居した知人である。

紫式部『源氏物語』蛍の帖(式部は「日本紀の局{*通}」といわれた)源氏は女友だち、玉かづらが雨の退屈しのぎに読んだ物語をけなしたのに答えて「骨なくも聞えおとしけるかな。これら(の物語*)にこそ神代より世にあることを記しおきけるなり。日本紀などはただ片そぼぞかし。これらにこそ道々しく詳しきことはあらめ」と言った。(*引用者、注 なお瀬戸内寂聴訳は第5巻、23頁)

Critique: Media Portrayals of the "Nihon-Shoki"

— Debate over the Sixth Century Chinese Records of "Fu-sang Guo" —

Ichiro Iki

Abstract

High school textbooks devote approximately 20 pages to the years spanning from the Tumulus period to the end of the 7th Century. These cover the era of the Five Kings of Wo Guo in the 5th Century, and Prince Shotoku and Emperor Tenchi in the 7th Century. "Nihon Shoki" is the original text from which our texts derive their information. Although postwar textbooks refute the "God State Japan" view of history, they nonetheless presume the Nihon Shoki descriptions of the 6th Century and thereafter are accurate. There are significant doubtful points however, despite the extensive studies conducted in the postwar era, including comparative studies of Japanese, Chinese and Korean history, as well as anthropological research into large ancient tombs. Chinese historical records refer to the arrival of the Xi-Fu in 3rd Century B.C. and to the Fu-sang Guo in the 6th Century. 1999 marks the 1500th anniversary of the visit of a priest from Fu-sang Guo to China. To commemorate this event, I sponsored the "Symposium of the Mysteries of Fu-sang Guo" in four different areas of Japan. The symposium was an attempt to revive those historical records which "Nihon Shoki" refused to acknowledge, and an attempt to press the academic community, mass media, and school textbook compilers to reconsider what they have been ignoring. Murasaki Shikibu (Lady Murasaki) once criticized "Nihon Shoki" as giving "only partial truth." Prince Duke Saionji Kimmochi (1849-1940) wrote, "The nation loses when it believes in groundless writings." Did we not experience more than just "loss" in 20th Century history?

Key words: Nihon Shoki, Fu-sang Guo, school textbooks, minority opinions